

だれかとつながる勇氣

御津南部小・6 西村 咲希

「人を大事にしなさい。何でもなければ話やおしゃべりができるようになれ」この言葉は、「世界でいちばんやさしいロボット」の中で語られ、私の心に深く刻まれた一節です。

この本は、心に障害をかかえる人や、自由に話すことの難しい人たちのこ独をどうすれば和らげられるのか、その問いに向き合い続けた吉藤健太朗さんの物語です。吉藤さんが開発した「オリヒメ」は、人の代わりに行きたい場所へ行き、カメラやスピーカーを通じて会話や授業参加を可能にするロボットです。病気で通学できない子どもたちや、外出が困難な高れい者などが、オリヒメを通して他者とつながることができるのです。

正直に言えば、私はこれまで「優しさ」というものをぼんやりとしていつかみづらい、どこか理想的すぎるもののように感じていました。教科書に書かれている「助け合いましよう」といった言葉も、現実とは少しきよりのあるものに思っていたのです。

しかし、この本を読み進めるうちに、「優しさ」とは、決してちゅう象的な理念ではなく、小さな気づきや目に見えない努力の積み重ねで成り立っているのだと知りました。「優しさ」は、ただ待っていればやってくるものではありません。自ら周囲に目を向け、相手の立場に立つて行動しようとする意志があつてこそ、形になるものと実感しました。

私自身、これまで「友達はいなくても大じょう夫」と思い、他人と深く関わることをさけてきたところがありました。自分の気持ちを言葉にするのが苦手で、こ独に慣れてしまっていたのかもしれない。ですが、御津南部小学校に転校し、そこで出会った仲間といっしょに六年間過ごしたことで、その考えは大きく変わりました。共に学び、遊び、ときに困難を乗り越えてきた友達との日常は、何ものにも代えがたい大切な思い出です。くだらないじょう談や何気ない会話の一つ一つが、私のこ独だった気持ちを少しずつとかしていききました。

この本が伝えているのは、特別な出来事や派手な行動ではありません。日常の中にあるささやかな関わりや対話こそが、人と人をつなぎ、心を救うきっかけになるのです。だからこそ私は、これからは自分から一歩ふみ出し、たとえ上手く話せなくても、相手に声をかけてみようと思いました。友達とのささいな会話を大切にし、だれかがさみしそうにしていたら、そつと声をかけてあげられる自分でありたいです。

この本を通して、私は「つながりの尊さ」と「優しさの本質」を改めて学びました。何気ない一言やふとしたふれあいが、思っている以上に大きな意味をもっていることに気づけたことは、私にとってかけがえのない学びであり、人生の中でも貴重な経験となりました。どんな形であれ、人と人がつながり、だれもがこ立しない優しい世界が広がっていくことを、心から願っています。